

池田大作とその時代

西園寺 一 晃

はじめに

皆さん、こんにちは。よろしくお願ひします。若い方々とお話しできるのは大変嬉しいのですが、私これから全く個人の見解でいろんな話をしますので、どうぞ後で「それは違うぞ」ということがあれば、ぜひ批判していただきたいと思ひます。本日はよろしくお願ひいたします。

今、よく言われます。「世界は百年に一度と言われる大転換、大変革の時代にある」と。大きく変化する時代、その中で私たちは何を指針にどう行動し、どう生きるか。私はそのヒントの1つは、これまで人類が歩んできた歴史にあると思ひます。私たちの先人たちが時代の変化にどう対処し、そこから何を学んできたのか。そこから学ぶべき点は多いでしょう。歴史というのは、意識的に記憶・記録しないと風化するものです。歴史を銘記し、忘れないようにするのは、単に思い出に浸ったり、成功の喜びや屈辱の憎しみを継承するためだけではなく、我々がこれまでの歴史の経験と教訓から何を学び、それを未来創造の糧としてどうしたらいいのか。特に、我々の先人たちが社会の変化をどう捉え、どう戦い、どう生きてきたのか、そこから学ぶべきだと思ひます。

人類の歴史は大変長いので、振り返ったらさきがありません。まず明治維新から紐解こうと思ひます。これは皆さんよくご存じでしょう。幕府、長州、薩摩、新選組、坂本龍馬、近藤勇など、様々な物語が生まれました。その時の若者たちは立場が違っても、日本国の形、将来をめぐって激しい争いをしたのです。内戦です。当時の若者たちは必死に日本の将来を考えて行動しました。その中で1868年に明治となり、明治政府が樹立され、アジアで初めて日本は近代国家として出発するようになりました。アジアで初めてです。

アジアのほとんどの国が外国の列強に踏み躪られ、植民地にされる中で、インドも中国も、アジアの大国は皆植民地でありました。しかし、日本はその列強の植民地になりませんでした。それはどうしてか。日本が自己変革を行って、近代国家に脱皮したからです。すなわち明治維新です。

Kazuteru Saionji (東日本国際大学客員教授)

本稿は池田大作記念創価教育研究所主催の講演会(2025年6月2日、於・創価大学S201教室)における講演に加筆修正を施したものである。

明治維新と日本の選択

明治維新というのは、日本がアジアで初めて近代国家として脱皮したこと。これは素晴らしいことです。だから、他の国々（インドや中国、東南アジアの国々）が皆欧米の列強に蹂躪され、植民地になったのに、日本だけはなりません。そのため、そうした国々からたくさんの若者が日本に学びに来ました。「どうしたら日本のように近代国家に脱皮できるのだろうか」と。中国で言えば、その中には孫文がいました。魯迅がいました。周恩来もいました。

その時の日本には、2つの道がありました。1つの道は、そうした苦しんでいるアジアの国々を助け、彼らと一緒にアアジアの独立を守り、アアジアの繁栄と一緒に汗を流す道です。この考え方は、皆さんご存じの自由民権運動の中にあります。

もう1つの道は、強くなって軍勢力を強くし、富国強兵を行い、列強の仲間入りをして、彼らとともに植民地争奪戦に参加する道です。これは富国強兵、軍国主義の道です。この2つの道があった。残念ながら日本は軍国主義の道を選びました。

軍国主義とは何か

ただ、軍国主義といっても、私も含めて我々は軍国主義とはどんなものか、体験もしたことがありません。そういう中に身を置いたこともない。よく分からない。しかし、少なくとも民主主義の対極にあるものです。軍人が政治、経済、文化、メディア、ひいては宗教までも支配する体制です。軍人独裁のもと、彼らは特別な権限を持ち、反対するものは搜索令状も逮捕令状も持たずに片っ端から土足で家に入り込み、逮捕する。投獄する、拷問する。対外的には武力侵略です。当時の日本の目的地は朝鮮半島と中国、そして東南アジアと南西諸島です。

皆さんはおそらくよくご存じだと思います。「国家神道」というものがありました。軍国主義的な思想で国民を統一するために、軍部が国家神道というものを作ります。それは神社神道と皇室神道を結合させ、国家神道としたものです。全国民にこの国家神道を信仰するように強制する。その象徴が靖国神社です。全ての既存の宗教、これは仏教もキリスト教も含んで国家神道の下にあり、絶対服従を強いられました。ほとんどの宗教団体は国家神道の前でひれ伏しました。

軍国主義下での「ノー」

当時の日本は、ほとんど全ての政界、財界、文化界、メディア、宗教が軍国主義になびきます。多くの国民も同じです。日本の軍国主義の軍隊が朝鮮に攻め入る、中国に攻め入る。朝鮮や中国の都市を占領するたびに、日本では提灯行列が繰り広げられました。国民が狂喜して提灯を持って行進する。「勝った、勝った」と。

当時の日本社会はまさに軍国主義一色でした。世論の大勢は軍国主義になびき、対外侵略へとなびきます。皆さん、世論は重要です。その時々国民大衆が考え、何を望んでいるのか。いつの世にもこれは知らなければなりません。しかし、世論の大勢、多数世論が正しいとは限りません。歴史を見ても、正義、真理は往々にして初めは少数なのです。大きな誤った流れの中にあっ

て、「それは違う」、「それは間違いだ」と気づいた人はいます。

それでも軍国主義の「大勢」という圧力の前に、「それは違う、間違いだ」と言える勇気のある人はそう多くありません。言えばメディアに叩かれ、周囲からは白い目で見られ「村八分」にされてしまいます。それだけでなく特高警察に付け回され、逮捕され投獄される危険があります。投獄後に待っているのは拷問です。殺されるかもしれないのです。だから多くの人は間違いだと分っていても「間違った大きな流れ」に迎合するのです。

このような言葉があります。「千万人と雖も吾往かん」。これは吉田松陰が好んで使った言葉だそうです。しかし、もともとは孟子の言葉です。「自ら顧みて枉（まが）らざれば、千万人と雖も吾往かん」。自分の信念を貫き、どんな困難、非難、中傷があっても恐れず、多数に流されず、堂々と前に進むという意味です。

あの軍国主義の時代、体制に逆らい、政治に逆らい、反抗すれば死も覚悟しなければならない。しかし、その中でも「千万人と雖も吾往かん」という信念を貫いた人は少数ながらいました。その1人が皆さんの大先輩である創価学会第一代会長の牧口常三郎という人であることはよくご存じだと思います。牧口は当時の流れに逆らい、世論の大勢に逆らい、軍国主義に逆らい、対外侵略の国策に逆らい、軍国主義体制に公然と「ノー」と言ったのです。それに対し、もちろん弾圧が始まります。さらに弾圧を恐れた宗門は牧口を非難し、国家神道に、軍国主義権力にひれ伏すように命じます。それでも牧口の信念は揺らぎませんでした。そして当然のことながら逮捕され、投獄され、激しい拷問を受けます。

拷問と牧口常三郎の死

当時、少数ながら軍国主義に逆らい、「ノー」と言って捕まって投獄され、拷問された人はいます。でも、その人たちの多くは拷問に耐えられず転向します。転向というのは、信念を曲げ、信仰を捨て、権力にひれ伏すということです。それを公に宣言します。そうしたら命は助かる。

ところが、どんな拷問にも牧口は屈しませんでした。皆さん、「拷問」といっても我々には分からないですね。時代劇に出てくるようなものです。あるいは、反社会的なヤクザの世界ではあるかもしれません。我々には分からないが拷問といえば「殴る」「蹴る」「刃物で傷つける」というようなことでしょう。しかし、究極の拷問というのはそうではないそうです。殴るんでも蹴るんでも、刃物で傷つけるのでもない。究極の拷問というのは食べさせず、飲ませず、眠らせない。これが究極の拷問だそうです。

牧口常三郎は獄中で亡くなります。獄死します。後で分かったことですが極度の衰弱、極度の栄養失調でした。食べさせず、飲ませず、眠らせずだったことが容易に想像できます。牧口はあの時代、「最大の問題は軍国主義の暴走を止める事だ。軍国主義が続けば国民大衆は傷つき、苦しみ、アジア諸国との関係は破壊され、国は滅びる」と考えたのです。そのために立ち上がり、命をかけて戦ったのですね。

皆さん、私は考えました。もしそういう状況があったとして、私はそれなりに自分の意見を持つ

ているし、信念も持っています。どんな非難中傷にも屈しない。そういう決心はあります。しかし、もし私が鉄砲を突きつけられて、「お前の信念を曲げなければ撃ち殺すぞ」と言われたら、それでも「殺されても信念は曲げない」と言えるか。私はそうありたいけれども、正直言ってそういう自信はありません。

つまり、我々の先人たちは、本当に世界の平和のために、国や国民の将来のために、人間の尊厳、信念のために命をかけて立ち上がった。その結果、今の我々があるのです。

冷戦時代と核兵器廃絶

さて、日本の軍国主義は戦争に敗れました。ヒトラーのファシズムも敗れました。そして戦後が始まりました。大戦が終わったということは、熱い戦争（ホットな戦争）が終わったということです。しかし、それは冷たい戦争（クールな戦争）の始まりでした。冷戦です。世界は3つに分断されました。アメリカを中心とする西側陣営、当時「ソ連」と呼ばれたソビエト社会主義連邦を中心とする東側陣営、そしてその両方とも同盟を結ばない中立な第三世界、発展途上国です。当時の第三世界の代表はインドとかエジプトとかインドネシアでした。

東西両陣営の人たちは、お互いにお互いを悪魔と見なし、憎み合い、「悪魔から身を守ると同時に、隙あらば相手を滅ぼす」と考えました。どういう現象が起きたかという、例えば敵対する2人がいます。相手がピストルを持った。自分も持たなきゃダメ。相手が機関銃を持った。自分も持たなきゃやられる。相手が大砲を持った。私も持たなきゃいけない。こうなりますよね。それが東西両陣営で起きた軍拡競争です。

第一次大戦、第二次大戦の戦争と違うのは、もし第三次世界大戦が起きたならば、それは大規模な核戦争です。当時、アメリカとソ連、2つの超大国、これが持っている核兵器で、人類は何回も消滅できる、それだけのものを持っている。しかし、大規模核戦争に勝者はいません。敗者は人類です。広島や長崎の惨状を見て、「核兵器は恐ろしい」と世界中の人はそう思った。しかし、まさかすぐに核戦争が起きるとは誰も考えない。それほど危機感を持って戦争が終わったばかりだった。だから、核兵器を廃棄せよという意見は世界中にありましたけれども、それが本当に緊急な事態だとはほとんどの人は思わなかった。

戸田城聖の核兵器廃絶宣言

このような状況の中で、日本から一人の宗教指導者が声を上げました。それは皆さんの先輩、創価学会の第二代会長、戸田城聖です。1957年9月8日、若者を前にして彼は核兵器廃絶を世界に呼びかけました。戸田は「今の世界にとって緊急最大の問題は核兵器の廃絶だ」と確信して、行動を起こしたのです。「今やらなければ人類は核兵器によって滅亡する」そういう危機感を持ったのです。

しかし、この戸田の叫びは、当時日本のメディアはほとんど取り上げませんでした。ほとんどの人は、核兵器が怖いと思っ

たのです。

しかし、戸田が核兵器廃絶を叫んで数年後、戸田が危惧していた事態が起きました。キューバ危機です。皆さん、興味があればキューバ危機をネット検索してください。詳しく載っています。簡単に言えば、1959年にカリブ海で、キューバで革命が起きました。カストロやチェ・ゲバラといった指導者が率いた革命軍が、当時の支配者を打倒して社会主義のキューバを作った。カリブ海といったらアメリカの裏庭です。東西冷戦の中で、アメリカにとってはすぐ目の前まで社会主義が迫ってきます。これはアメリカの立場からすれば大変なことです。国家の存亡に関わるものです。まして、アメリカのすぐそばにできたキューバが社会主義であるから、そこにソ連のミサイル基地でも作られたら大変なことである。その危惧が現実になりました。ソ連がキューバに核ミサイル基地を作る。そして核ミサイル基地の資材とミサイルを積んだ運搬船がソ連を出発します。キューバに向けて。これがキューバに着いたらキューバは核ミサイル基地です。

キューバ危機と核兵器の脅威

アメリカはソ連に対して警告を発しました。そのソ連の運搬船がアメリカの近海に近づいたら、その船をミサイル攻撃する、撃沈する。それに対してソ連は、「もしアメリカがソ連の船をミサイル攻撃して撃沈したら、我々は核ミサイルをアメリカに撃つ」。アメリカも「もしソ連がアメリカに向けて核ミサイルを撃つなら、我々はモスクワに向けて核ミサイルを撃つ」。核戦争ですよ。

当時のアメリカ大統領はケネディです。当時のソ連のトップはフルシチョフという共産党第一書記です。この2人が核ボタンを解除しました。核ボタンに手をかけて、そしてソ連の船がどんどんキューバに近づいて、もしアメリカの近海に入れば、おそらく十中八九核戦争が起きる。核戦争には勝者はいない。人類は滅びる。世界はパニックに陥ります。

いろんな人が動いた。いろんな国が動いた。ローマ法王まで動いた。何とかしてやめさせる。まあ、いろんなことがありましたけど、結局、ソ連の運搬船はアメリカの近海近くまで来て、引き返します。そして核戦争は回避された。今の方々はこういうことがあったことを知らない。つまり、いつでも核戦争が起きうるんですよ。だから戸田城聖が「今の緊急な課題は、いかにして核兵器を廃絶するか。これが緊急な課題だ。でないと核戦争によって人類は滅びるかもしれない」と訴えた。これが現実なのです。

皆さん、今の核兵器は広島や長崎に落とした原爆なんか比べ物にならないほどの威力ですよ。あれの何十倍、何百倍もの威力です。今、世界にはどれだけの核弾頭・核兵器があると思いますか？今、ロシアが5500発持っています。アメリカは5000発持っています。中国は500発持っています。フランスが290、イギリスが225、インドが172、パキスタンが170、イスラエルが90、北朝鮮が50。全部足すと1万2千発です。これは専門家によると人類を20回くらい消滅させられる量だそうです。

ですから、このキューバ危機の後、核廃絶問題が大きな話題になって、その後、国連では核兵器禁止条約決議案が出されます。今現在、署名した国は94です。世界で唯一の被爆国、長崎・

広島で何十万人が死んだ日本。この日本は、国連の核兵器禁止条約に署名していないんですよ。

冷戦下の国際情勢と中国の存在

このキューバ危機以降、核兵器に対する脅威は増しました。戦争防止の議論も多くなりました。しかし、冷戦構造は変わりませんでした。複雑でした。東西両陣営の対立はますます激しくなる。そして複雑化したのは、1つは中国の存在です。中国は社会主義だから東側陣営に属しています。東側陣営の親分はソ連です。ところが、その中国は、あの誇り高い中国はソ連の衛星国になるのは嫌だ。「中国は独立主権国家である。ソ連の支配を受けない」ということで、ソ連との溝が深まります。つまり、東側陣営の中で分裂が起こりました。これが1つ。

それからもう1つは、中国の内戦が終結したことです。共産党勢力と国民党勢力が戦って内戦が起こった。共産党政府は勝った。国民党勢力が負けて、負けた一部の敗残兵は台湾に逃げ込んだ。あとは、台湾に行った国民党の残党が戦わず降参するのか、戦って玉砕するのかという問題。ところが、そこで朝鮮戦争が起きました。つまりアメリカは、中国の内戦では中立的な立場をとっていた。しかし、中国で革命が成功して、中華人民共和国という社会主義国ができて、これが台湾を制圧して統一をするという時になって、朝鮮戦争が起きて、アメリカと中国は敵対関係になります。そしてアメリカは最強の海軍第七艦隊で台湾を包囲し、台湾の政権を守る。それがなかったら、中国は台湾を制圧して統一したのですね。そこからいわゆる台湾問題が生まれたのです。

当時、中国の中でも大きな変化がありました。60年代の半ば、中国では文化大革命というものが起きました。皆さん、聞いたことがありますよね。中国の中で極左勢力が台頭して大混乱に陥る。外交もいわゆる「革命外交」をやって、それまで中国は周恩来外交のおかげで、第三世界の国々とは大変良好な関係にありました。それが、いわゆる革命外交によって、第三世界との関係も悪くなっていきました。そういう中国にとっては60年代というのは一番厳しい時期です。つまり、世界で最も強いアメリカとも対立し、もう一方で最も強いソ連とも対立し、国内は大混乱、経済も崩壊寸前。唯一の友達だった第三世界との関係も悪くなる。こういう状況です。

反中・嫌中と池田大作の「日中提言」

当時、そういう中で、日本の社会では反中・嫌中気運が蔓延していました。今の日本とちょっと似ていますが、当時は比べものにならないくらい凄まじいものでした。当時は中国問題とか日中友好なんて言ったら殺されますよ。当時、社会党という党がありましたが、それは今の小さな社民党の前身ですよ。当時は自民党、社会党の時代だったんです。だいたい議席の3分の2は自民党が持っていて、3分の1は社会党という、とても強い野党だった。

当時、この社会党の委員長は浅沼稲次郎氏です。この人は初めから「日本と中国は仲良くすべきだ、日本と中国は国交を樹立すべきだ」と叫び、そして1960年、彼は日比谷公会堂で演説会をします。演説の内容は、「日本は早く中国と国交を樹立して、日本と中国は仲良くすべきだ」というものです。その演説の最中、突然右翼の刺客が壇上に飛び乗ってきて、浅沼を刺しました。

浅沼稻次郎委員長は即死ですよ。そういう時代です。

私はまだ若かったけども、今でも覚えています。日中友好運動をしていた人は、今ではそんなことはありませんけど、何人も会社をクビになっていますよ。ある人、私の友人は必死になって日中の友好をやって、それを理由に小学生の子供が学校でいじめられる。それを見た奥さんが「あなた、子供のためにやめてください」と言いました。「でも俺が悪いことしたわけじゃない。正しいことやってるんだ」と。そして奥さんは子供のために離婚しました。そういう時代だったんですよ。

そういう時代に、みんながあっと驚くようなことが起こりました。それは池田大作、創価学会第三代会長が、1968年、突然第11回学生部総会において日中提言を行うのです。まず、どうしてこの時期に？冷戦が激しさを増し、中国は崩壊寸前、文化大革命で中国は混乱している。そういう中で、どうしてこの時期に？

池田大作の日中提言の内容

もう1つはその提言の内容です。今、皆さんに聞いたら当然と思うかもしれない。まず第一に日本と中国は国交正常化すべきだと。日本の政府は即時、中国の政府と協議を行って一日も早く国交正常化をすべきだと。当時の国際社会、日本政府の立場は「中国の代表は北京政府である中華人民共和国ではなく、台湾に内戦の時に逃げ込んだ国民党政権、あれが中国の正当な代表だ」という立場をとっていました。国連も中国を代表して参加したのは台湾の政権です。そういう中です。「日本は中国と即時に国交正常化すべきだ」と。

第二は、国連における中華人民共和国の議席は回復されるべきである。当時、毎年国連で中国の国連復帰問題が議論されていたが、米国や日本の反対で実現しなかったのです。

第三、日本は対中国貿易を大いに促進すべきである。

今聞けば別に当たり前のことです。でも当時はそんなこと言ったら殺されますよ。これはアメリカのアジア戦略に反し、日本の外交政策に反し、世論の流れに反するという。当時、池田大作はこう言いました。「我々は前を見なきゃ。将来、必ず中国問題が最大の問題になってくる。世界で今こそ取り組むべきだ」と。

当時、日本の首相は佐藤栄作氏です。60年代、佐藤栄作氏は長期政権だったんですけどね。3回訪米、アメリカに行っています。首脳会談。その初めの2回はジョンソン大統領で、3回目はニクソン大統領です。3回とも共同声明を出して、それは中国に対して非常に強硬な声明でした。アメリカのアジア戦略の中心は中国を封じ込めること。これを促進し、中国は国際社会に出さない。封じ込めておく。政治分断、経済分断、軍事分断を行って、中国を国際社会に出さない。それが日本の政策で、アメリカの政策であり、日本の世論の流れでした。こんな時期にこんな内容の提言。口の悪い人は「池田さん、頭がおかしくなったんじゃないか」こういう人さえた。しかし皆さん、戸田城聖が将来を見つめて声を大きく核廃絶を叫んだのと同じように、池田大作という人も将来を見つめて中国問題を真正面から取り上げたのですね。

ニクソン訪中と日中国交正常化

誰もが「中国はアメリカと関係が悪くなって、ソ連と悪くなって、第三世界とも悪くなって、経済は破綻寸前だ、このままでは中国は滅びるだろう」と思っていた。しかし皆さん、そういう中で、世界の情勢を根本から覆す大きな出来事が水面下で進んでいたんです。

まずアメリカです。ニクソンは非常に憂鬱でした。それはジョンソン前大統領から引き継いだ荷物があまりにも重かったのです。その荷物はベトナム戦争です。ベトナム戦争は泥沼化して、アメリカは最大時に53万の軍隊を投入し、核兵器以外、化学兵器を含む全ての武器を使った。皆さんよく知っていると思います。枯葉剤とかね。化学兵器ですよ。あれでも勝てない。南ベトナムのゲリラの勢力がどんどん増えている。

その時にアメリカの最大の憂鬱は「ベトナムで勝てない」ということじゃなかったんですよ。それは「アメリカという国は世界最強の国、最大の最強の世界国家である」ということ。「世界の警察官、世界の裁判官」と言われたアメリカが「ダメ」と言えばダメ、「悪い」と言えば悪い。それだけの力を持っている。そのアメリカにとって一番重要な地域はどこか。それは本国ですよ。アメリカ本国。これが一番大事です。当然ですよ。その次に大事なのは西ヨーロッパだ。西ヨーロッパには何があった？アメリカを中心とした北大西洋条約機構（NATO）という軍事ブロックがある。片方には当時ソ連を中心としたワルシャワ条約機構という軍事ブロックがあって対峙している。アメリカがベトナム戦争の泥沼に足を突っ込む前のNATOとワルシャワ条約機構軍の力関係は大学生と小学生ほどの差があり、圧倒的にNATOが優勢でした。しかし、アメリカがベトナムの泥沼に足を突っ込んでいる間に、この力関係が劇的に変わってきた。このまま進めば、ワルシャワ条約機構軍がNATOを上回る。アメリカは何とかしてベトナムから足を抜いて、早く西ヨーロッパを立て直さなければならないということだった。

そしてニクソンは南ベトナムを放棄することを決断します。ただ、アメリカが一番恐れたのは、アメリカがベトナムから足を抜く、出ていった、その空白地帯に最大のライバルであるソ連が入ってくる。それだけは防ぎたい。こう思ったのです。そしてニクソンは考えました。「どうしたらいいのか。中国を利用しよう」と。ソ連と激しく対立する中国を利用し、中国の力をもってソ連の南下を防ぐという。ニクソンは特別補佐官のキッシンジャーを呼びます。そしてキッシンジャーに指示を与えます。「極秘に中国と交渉せよ」。

同じ時期、中国でも変化がありました。中国は先ほど言ったように、ものすごく孤立して経済も破綻寸前で大変な時期です。1960年代の終わりのある共産党の秘密会議で、あの自信満々の、傲慢と言われるほどのカリスマ的な指導者である毛沢東が初めて弱音を吐きました。「我々は孤立してしまっただろうか」と。それを聞いて周恩来が動きます。周恩来は文化大革命の中で排除されたベテランの軍事指導者を秘密裏に招きます。皆さん、名前をご存じないかもしれませんが、葉劍英、陳毅、徐向前、聶榮臻というベテランの元帥ですよ。この4人を密かに呼んで質問します。「我々の対外戦略は正しいのか？間違っているのか？」4人は検討して答えます。「我々の対外戦略は間違っている。我々はまだ弱い。経済力も軍事力も弱い。なの

に2つの超大国であるアメリカとソ連を同時に敵に回すなど、戦略的にはあり得ない」と答申しました。

それを聞いて周恩来は第2の質問を行う。「それでは今の中国にとって最大の脅威はアメリカなのか、ソ連なのか？」軍人たちは色々検討して、また答申します。「我々にとって今現在、最大の脅威は、7000キロの国境を接しているソ連にある。今、ソ連に攻められたらひとたまりもない」。それを聞いて周恩来は毛沢東のところに行って報告します。毛沢東はしばらく考えて周恩来に指示を出します。「極秘裏にアメリカと交渉せよ」。

図らずもアメリカと中国が同じようなことを。同床異夢ですけどね。その後は皆さんよくご存じです。その周恩来とキッシンジャーの水面下での外交の後、突然1971年にアメリカと中国は同時に世界に向けて発表します。「ニクソン大統領が北京を訪問する」と。中国はアメリカが承認していない国ですよ。未承認の国。アメリカは最大の国ですよ。最強の国。そのアメリカのトップが未承認国の北京を訪れる。こんなことはありえない。アメリカと中国で同時に発表しました。中国では外交部（外務省）のスポークスマンが発表しました。同じ時間、アメリカではニクソンが自らテレビに出て発表した。

日本はアジアにおける最大の同盟国です。その同盟国の首相である佐藤栄作さんがそれを聞いたのは、ニクソンの発表の3分前ですよ。これが国際政治です。そしてここからは、あれよあれよという間に世界が変わる。世界はなだれを打って中国承認に走る。その時の国連総会では圧倒的多数で中国の議席が復活する。そして慌てたのは日本です。佐藤栄作さんはどうしようもなくなって退陣しました。

ポスト佐藤を争ったのは田中角栄と福田赳夫です。これ、皆さんご存じですよ？勝ったのは田中角栄です。田中さんはああいう性格でした。日中をやると決めたらやるんだと、党内でも、国会でも何の協議もしないで、いきなり北京に飛んだのです。田中流「ぶっつけ本番」外交、本当のところ成功する自信はなかったのです。ただ、その前には色々な、つまり日本と中国は国交も何もないですから、何の関係もない。国交正常化があるんだって、準備も何もできないわけですよ。接点もないわけですから。そこで自民党でもない、日本の政府でもない勢力が水面下で中国との橋渡しをする。橋渡しというのは、中国は何を考えているのか、国交正常化でどういう条件を出すのか、日本は、日本の政府はどういう考えで、どういう条件を持っているのか、お互いにこう知らせ合う。その役割を担う人たちは日本にはたくさんいましたが、例えば社会党。一貫して中国とパイプを持って関係の深かった党でした。自民党の中にも親中派の議員はたくさんいました。松村謙三、石橋湛山、古井喜実など、色々な人がいました。そういう人たちは皆水面下で動いていました。ところが私、当時朝日新聞東京本社にいて、日本のメディアにとって謎があったんですよ。分からない謎があったんです。それは、中国の周恩来が水面下の話し合いの仲介役に選んだのは、社会党でもない、自民党の親中派でもない、公明党だったんですよ。公明党というのは、できたばかりの党で、中国との関係は何もない。交流もない。でも周恩来が選んだのは公明党だった。

ちょっとこんなこと言ったら公明党の方に怒られるかもしれないけども、公明党の当時の方々も頑張った。でも全然公明党じゃないんですよ、問題は。池田大作の日中提言なんですよ。あれが周恩来の頭にこびりついているんです。「池田大作という人がこびりついている、この人が作った党なのか。信頼できる」それだけです。まあ、こんなこと言っちゃいけないんですけど、当時、一部の公明党の人たちは「俺たちが全部やったんだ」って威張っていた。全然違うんですよ。

周恩来と池田大作の会談

つまり、「あの池田さんは頭がおかしくなったんじゃないか」と言われたほどの日中提言。あの時期、それが2年3年経って全部実現した。そういうことなんですよ。やはりこれが優れた指導者なのですね。分析力と決断力。大きな国際情勢の変化を読んだ、確信を持った決断だったのです。

それで国交正常化が実現しました。皆さんね、人間っていうのは面白いもんですよ。国交正常化が実現すると、政界も財界も誰も彼も皆こぞって北京詣ですよ。昨日まで反中を言っていた自民党の代議士が「俺は初めから日中友好だ」と言い出した。そういうものです。だから本当にやった人、池田大作という人は、北京に行かなかった。「行きたい人が行けばいい」と。本当に頑張っていた。自分からは言わないものでしょう、きっと。

でも、北京では周恩来がぜひ池田大作先生に会いたいと思っていた。当時、周恩来は癌に冒されていました。膀胱癌です。今の医学ならば治ったかもしれない、70年代です。彼は体調が悪いにもかかわらず、決して検査を受けなかった。それはニクソン訪中もあるし、日中正常化もある。それをやらないうちは断固検査を拒否した。癌がもう蔓延していた。それでついに1974年に入院します。もう膀胱癌の末期です。

周恩来は周囲の1人に「自分はもう長くない。生きていうちにやっておかねばならないことがある。会っておかねばならない人がいる」と言いました。その1人が日本の池田大作先生だ。「ぜひ会いたい」と。それが日本に伝わります。それを受けて、池田大作会長先生は北京に赴きます。そして1974年の第1次訪中が5月です。1974年の初めに入院して、1976年の1月に亡くなるまで、周恩来は10回の大手術をして8回の小手術をした。ほとんど動けない。第1次訪中の時は事態が急変して大手術が行われた。だから会えなかった。それを周恩来はとても嘆いていて、「もう私は長くない。ぜひぜひ会いたい」と。それで2回目の訪中はその年の12月です。先生が第2回の訪中をされた時、周恩来の部下で、周恩来は病気ですから政治を取り仕切っていた鄧小平が出てきて、池田会長に会って言いました。「大変申し訳ない。周恩来総理は人に会える状況ではありません。本人はどうしても会いたいと言っているけど、医者が許しません。申し訳ありません。私が代わりにお会いします」。

池田先生は言ったそうです。「もちろん総理の体は大事です。私が無理に会えば寿命を縮めるかもしれない。どうかご安静になさってください」。その間に舞台裏では大変なことが起こっていたんです。周恩来はどうしても聞かない。医者は反対した。医師団、秘書団も反対。それでも

会う。医師団も秘書団もどうしようもなくなった。周恩来を説得できるのは奥さんしかいない。奥さんというのは鄧穎超氏です。この人しかいない。それで医師団の代表と秘書団の代表が奥さんを訪ねます。「実はこうこうこういう状況です。今、人に会う仕事をしたら命を縮めます。それでも周総理は池田会長に会いたいと言っている。ぜひ止めてください」。

鄧穎超夫人はしばらく考えて言ったそうです。「会わせてやってください。人間は命をかけても、命を縮めても、やらなきゃいけないことがある、会わなければならない人がいる。それが今です。周恩来の希望は必ず叶えさせてあげたい」。

池田一行は最後の夜、お世話になった方を招いて答礼の宴会をやっていました。もう明日は帰る。その時に、ある中央の幹部が先生の耳にそっと囁いたそうです。「周恩来総理がお会いします。ぜひ来てください」。先生は断ったのです。「私が今お会いしたら、総理の命を縮める。私はご遠慮します」。しかし、「総理の意思は固い。ぜひ来てください」と。それで実現した会談です。病院の医師団の条件は5分でした。それが30分。もうそろそろ、もうそろそろとメモが何回もあった。総理は必要なしと判断し、無視する。

私はただ病気で、もう後が短い周恩来がどうしても日中提言などのお礼を言いたかったということだけではないと思います。それほどまでに命を縮めてまで会った。それは日中関係の将来を託したんですよ。米中の和解がなった。日中の国交は正常化した。周恩来も池田も、これが終わりだとは絶対思っていない。国交は正常化したけれども、日中平和友好条約はまだ結ばれていない。まだまだやる事はたくさんある。周と池田にとって、日中国交正常化は重要ですが、通過点に過ぎなかったのです。米中国交正常化、米ソ関係の改善、中ソ関係の和解、冷戦の終結。そして究極の目的は世界平和でした。それがあの30分に凝縮された時間。そして周恩来も池田大作も、その約束を次の世代に、若者に託したんです。私はそう思います。

日中青年交流と「指導者の条件」

実はですね、池田一行の第1回の訪中の時に私も若干関わっているんです。というのは、池田一行の訪中が決まった時、私は、ある人を通じて、周恩来からメモをもらいました。メモには何が書いてあったか？「池田先生の全てを知りたい。生活習慣、食べ物の好き嫌い、その他何でもいい。池田先生のことを知りたい」。周恩来は招くのであれば、誠心誠意接待したいと思ったんです。私は色々調べました。例えば、そのうちの1つは、これは先生に確かめてないから、本当かどうかは分かりませんが、先生の生活習慣の1つは、夜眠る時に真っ暗でないと眠れない。光がちょっと入っただけでも眠れないということだそうです。少なくとも私はそう聞いた。それを北京に伝えた。池田先生が北京に行った時、北京飯店に泊まったのですが、その部屋のカーテンが全部変えられていたそうです。厚い黒いカーテンに。あれだけの病気をしていながら、そうした配慮をされていたのです。

その先生の訪中の時に、私はたまたま同じホテルに泊まっていました。そして随行した方から電話がかかってきて、「先生の日程は9時には終わります。その後は部屋にいます。宜し

ければいらっしゃいませんか」と。私は先生の部屋にお邪魔しました。先生と最近の話をした。もう時間もありませんので、先生とはいろいろお話をさせていただきましたが、1つだけご披露します。当時、日中国交正常化は既に実現していました。ところが国交正常化の共同声明で約束した日中平和友好条約の締結はまだ実現していませんでした。つまり国交正常化というのは、マイナスの関係だったのをゼロに戻した。この日中関係を前に進めるためには、平和条約が必要なんです。それを結ばなければいけない。ところが、当時の非常に複雑な日本、中国、アメリカ、ソ連との色々な関係の中で、この平和友好条約はなかなかできなかった。

私は池田先生に聞きました。「先生、今、日中関係の中で一番重要なことは何だと思えますか？」私は99%返ってくる答えは、「それは日中平和友好条約を結ぶことだ」とばかり思っていました。でも、先生は、「それは日中の青年交流だ」と即答したんですよ。私は理解できなくて、あんまり。先生はもっと遠くを見ていた。50年先、100年先を見ていた。それで先生はこう言いました。「青年交流と言っても、コミュニケーションを取らないといけないから言葉が必要だ。日本で中国語を学ぶ人はまだまだ少ない。多くの若者が中国語を学ばなければいけない。私のところには創価大学という大学がある。そこで中国語を学んでもらうと同時に、全国から中国語をやっている若者を集めてスピーチコンテストをやろう」と。先生の提案ですよ。

それでその年から創価大学で中国語弁論大会が始まりました。これは今でも続いています。先ほど大学の人もお話ししたんですけども、その話が出たのは74年の5月ですよ。私がお会いした時。弁論大会が始まったのはその年の秋ですよ。大学というのはね、もうどこの会社もそうだけど、皆予算で動いているわけですよ。で、突然「弁論大会をやろう」って。そんな予算ないですよ、それは。で、我々困った。第1回の弁論大会の予算は、先生がポケットマネーを出した。そうやって始まったんですよ。

もう私はもっと色々なことを喋りたいんだけど、私が言いたいのは、やはり皆さんは今、一生懸命勉強して、ここを巣立って、いろんなところへ行って、リーダーになると思います。リーダーの条件。私は周恩来氏とは20回以上お会いしました。池田大作先生とも6回お会いしました。お二人とお会いして、いろいろな話をさせていただき、つくづく思った事があるのです。それは、「本当に強い人は優しい。本当に能力のある人は謙虚である。そして足元のことをしっかりと見据えてやると同時に、10年先、50年先を考える。これが指導者だ」と。まあ、我々多くは凡人ですから、そうなかなか簡単にはいかないですけども、やはり我々が学ぶべきことはそういうことだと思います。そして、私はもう80過ぎまして、もう古い先短いんですけど、やはりあの世代の先人たち、牧口、戸田、池田、周恩来、その他多くの人、世界のリーダーのやったこと、言ったことは我々に対する遺訓ですよ。我々に託したこと。我々がそれを引き継がなければいけないということだと思います。

皆さんの貴重な時間を使い、取り留めのない話をしました。もし皆さん、何か反論があれば、ぜひ頂きたいと思います。ありがとうございます。

質疑応答

司会：ありがとうございます。では、少し時間がありますので、質問の時間を取らせていただきます。皆さん、何かあったら少し手を挙げてください。

学生：本日はお越しいただき、貴重なご講演、本当にありがとうございました。私はちょうどアメリカから1年間留学をして帰ってきた中で、中国とアメリカの関係というのが本当に悪化しているなというふうに思っていて、日中は隣人だからこそ、友好というものを本当に大切にしなければいけないというふうに今すごく感じています。これまで外交を学んできた中でも、日本と中国やアメリカの架け橋になる必要があるということは自覚しているのですが、具体的にどのように架け橋になることができるのだろうかということを、すごくまだ模索中でして、もしそこに関して何かお考えであればお聞きしたいです。よろしく願いいたします。

西園寺：これは答えになるかどうかわかりませんが、やっぱり大きな友好というのは、個人と個人の友好から始まると思うんです。私は北京で学生生活を送っている頃、よく周恩来総理の家を訪ねました。あの周恩来が19歳の時、日本に来たんですね。日本に「中国はいかにして近代国家になれるか」という答えを見つけに来た。その時にもうすでに日本は朝鮮半島や中国に足を踏み入れていて、相当特高警察に追われたりしてひどい目にあっただけでしょうね、周恩来青年は日本で。私はそれを知っているから、ある時思い切って周恩来に尋ねました。「周おじさん、あなた、本当は日本嫌いでしょ？」と言ったんです。私の質問に、周恩来は大笑いして「そんなことはないよ。私は日本が好きだ。日本人は礼儀正しいし、伝統文化を大事にしている。それに私は日本にいた頃大変貧しかった。お金がなくて、ご飯を食べられない時もあった。そんな時、下宿のおばさんが優しくしてくれて、時には家に招いてごちそうしてくれ、励ましてくれた。あの時の豆腐は美味しかった。今でもあの味を思い出すよ」と言った。

皆さん、もしね、その下宿のおばさんが意地悪な人で、周恩来をいじめたら、おそらく周恩来は日本に対してうんざりするほど悪い印象を持ったでしょう。そういうことだと思うんです。私自身がそうですよ。私、初めの頃、創価学会に偏見を持っていた。どうして偏見が取れたかということ、私の一番の素晴らしい友人が学会員だった。で、知らなかった。「こんな世の中に素晴らしい人がいるのか」と。それからですよ。つまり、個人と個人の交流というのはとても大事です。

今、日中韓、色々な問題があります。日本人が中国に違和感を覚えている。中国人が日本に違和感を覚えている。たくさんあります。違う国だからしょうがない。でもね、今、中国からたくさん留学生が来ている。今、日本に住む中国人も多くなっている。皆さん、もし周囲に中国人だけでなく外国人がいたら、ぜひ優しくしてあげてください。そうしたら彼は必ず日本が好きになる。日本に対して良い印象を持ってくれるようになる。これが友好の始まりです。私はそういうことだと思っています。ありがとうございます。

学生：失礼いたします。まずは、貴重なご講演、本当にありがとうございます。ここで質問なのですが、中国だけでなく、将来、国際的な舞台で活躍するためには、まずこの大学生のうちには何か、言語を学ぶというのは大事だと思うのですが、その他に大事なもの、こういうものがあつたほうが良いというものがあれば教えていただきたいです。

西園寺：これも答えになっているかどうか分かりませんが、私の経験です。私は中学3年の時に北京に行って留学しました。北京に行った時は全く言葉が分からなかったので苦労しました。もちろん徐々に言葉を覚えてゆきましたが、つくづく思ったんですけど、まず言葉です。言葉が少しずつ分かっていくということは、世界が広がっていくということです。もう1つは、言葉というのは文化であつて、言葉の裏にはその国の政治、経済、歴史、文化がある。だから言葉を学ぶと同時に、文化、経済、政治を理解しないとイケないと思います。ですから、特に文化ですね。文化と歴史、これと言葉の勉強と結びつけて、その国のことを知る。そうすると、もっともっと理解が深まっていくと思います。

学生：ご講演ありがとうございました。僕は最近、色々なニュースとかを見ていて、中国の方に限らず、日本の労働の体制が外国人労働者もたくさん受け入れる姿勢になってきて、でも日本人の国民性がまだ分からないんですけど、言語以前に、排他的な姿勢というか、身構えてしまうのが現状多いと言われてます。海外の友人とかも「日本で働きたいけど受け入れられるかどうか正直心配なところがたくさんある」と言っていて、僕自身も将来的に関わる上では本当にオープンな姿勢でいきたいと思ってるんですけど。言語以外にお互いが働きやすくするような状態を作るには、どういう意識を持っていた方がいいのでしょうか。

西園寺：私は中学3年から大学を出るまで、10年間北京で過ごしました。帰国して、長く新聞社に勤めたんですけども、新聞社を定年退職してから、いくつかの大学で、若い人たちとふれあつた経験がたくさんあります。全てがそうであるとは分かりませんが、私は例えば慶應で教えたし、工学院大学でも教えたし、名古屋の女子大学でも教えたし。

1つ、私がものすごく気になるのは、今の学生さんたち全てではないですが、あまり海外に興味がないということです。我々の世代は、何とかして外国に行きたい、外国に行って見てみたい、何でも見てみたい、体験してみたいという時代でした。それから今、会社なんかでも話を聞くと、海外出張したくない、駐在もしたくない。まあ、日本がそれだけ便利な国で、良い国だからかもしれないけど、やはりそれは仕事であれ旅行であれ、何であれ、できれば色々なところに行くべきです。そうすると、世界には色々な価値観があることが分かります。今のこのグローバル化した世界というのは、色々な違つたものが存在しています。国も民族も、言語も宗教も価値観もイデオロギーも色々なものがありますよね。それが分からないと、往々にして日本の価値観だけで物事を判断してしまう。まあ、悪い言葉で言えば、

本当に井の中の蛙になってしまう。もっとたくさんものを見るべきです。

面白い話があるんですね。これもちょっと答えになるか分かりませんが。文化とかね、習慣とか知らないと誤解を生みます。よく日本人はね、「中国人はどうしてお礼を言わないのか」と。例えばお客さんが来て、その人にお土産だと言ってお菓子をあげたと。日本人ならば「ありがとうございます」ともらって、次に会った時に、また「あのお菓子、美味しかったです、ありがとうございます」と。3回目に会った時もお礼を言うかもしれません。中国人はその時にお礼は言うけど、2回目からは絶対お礼を言いません。どうしてお礼を言わないのか？2回目に「お菓子美味しかった、ありがとう」って言ったら、「またくれ」という意味になるんですね。それは習慣が違うから、良いとか悪いとかの問題ではなく、つまりそんな小さなことから誤解が生じる。だから我々は、色々な世界には色々な価値観があって、色々な考え方があるということになるべく多く学ぶべきだと思います。

本日はありがとうございます。